

JVCKENWOOD

JVCケンウッド 決算説明資料

2022年3月期 (IFRS)

2022年4月27日

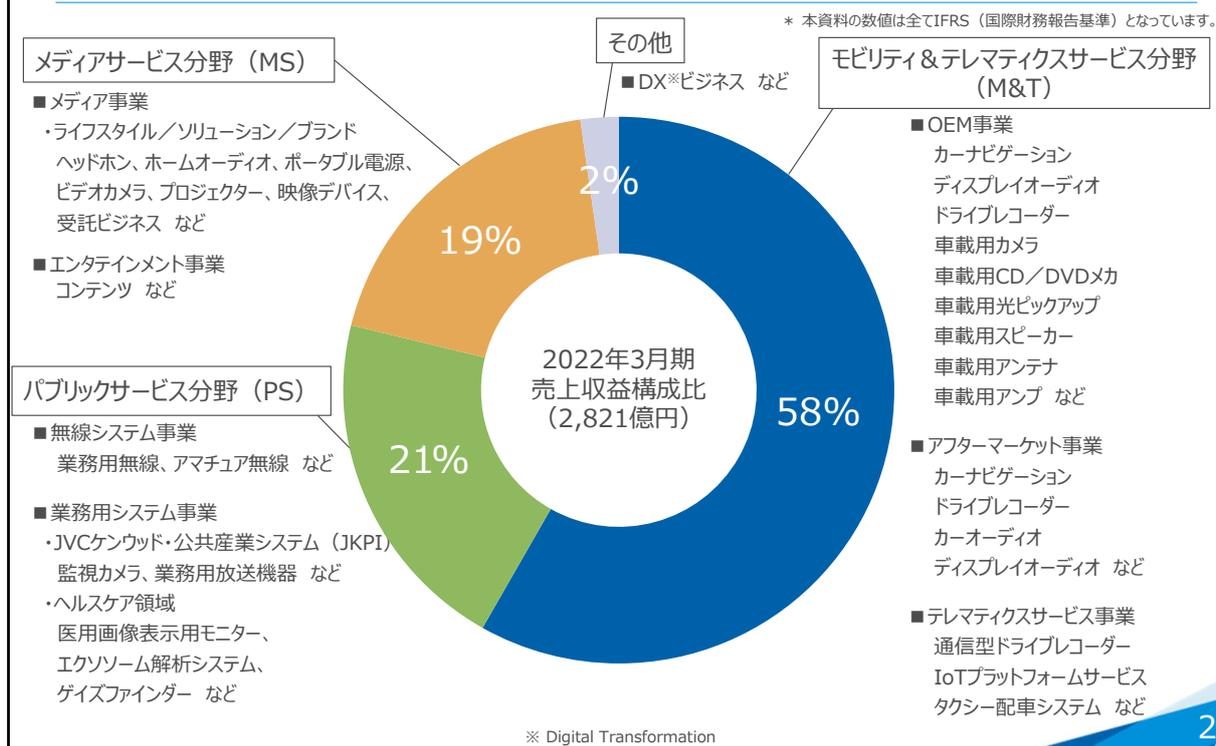


株式会社JVCケンウッド

Copyright © 2022 JVCKENWOOD Corporation. All rights reserved.

2022年3月期通期の決算説明をさせていただきます。

事業内容



(説明省略)

1. 2022年3月期 決算概況

2. 2023年3月期 通期業績予想

3. 中期経営計画「VISION2023」の進捗

The logo for JVCKENWOOD, consisting of the company name in a bold, sans-serif font, is positioned in the bottom right corner of the slide. It is set against a blue geometric background that forms a triangle pointing towards the bottom right.

(説明省略)

1. 2022年3月期 決算概況

2. 2023年3月期 通期業績予想

3. 中期経営計画「VISION2023」の進捗

The logo for JVCKENWOOD, consisting of the company name in a bold, sans-serif font, is positioned in the bottom right corner of the slide. It is set against a blue geometric background that forms a triangle pointing towards the bottom right.

(説明省略)

2022年3月期 決算ハイライト

- 売上収益は、半導体などの部品供給不足による影響を主にM&T、PSで大きく受けたが、新型コロナウイルス感染症の影響減少に加え、4Qには大幅に生産と売上が回復し、増収
- 営業利益は、増収効果に加え、子会社の売却益及び金融資産の評価益などにより、その他の収益が増加し、大幅増益

(億円)

	'21/3期		'22/3期		前期差
		構成比 (%)		構成比 (%)	
売上収益	2,736	100.0	2,821	100.0	+ 85
売上原価	1,990	72.7	2,063	73.1	+ 72
売上総利益	746	27.3	758	26.9	+ 12
コア営業利益 [※]	75	2.7	71	2.5	△ 3
営業利益	49	1.8	91	3.2	+ 42
税引前利益	45	1.7	85	3.0	+ 40
親会社の所有者に帰属する当期利益	22	0.8	59	2.1	+ 37

※ 営業利益から、その他の収益、その他の費用、為替差損益など、主に一時的に発生する要因を控除したもの

損益為替レート	'21/3期					'22/3期				
	1米ドル 1ユーロ	Q1	Q2	Q3	Q4	通期	Q1	Q2	Q3	Q4
	108円	106円	105円	106円	106円	110円	110円	114円	116円	112円
	119円	124円	125円	128円	124円	132円	130円	130円	130円	131円

2022年3月期、1年間の業績です。売上収益2,821億円で、対前年で85億円の増収です。

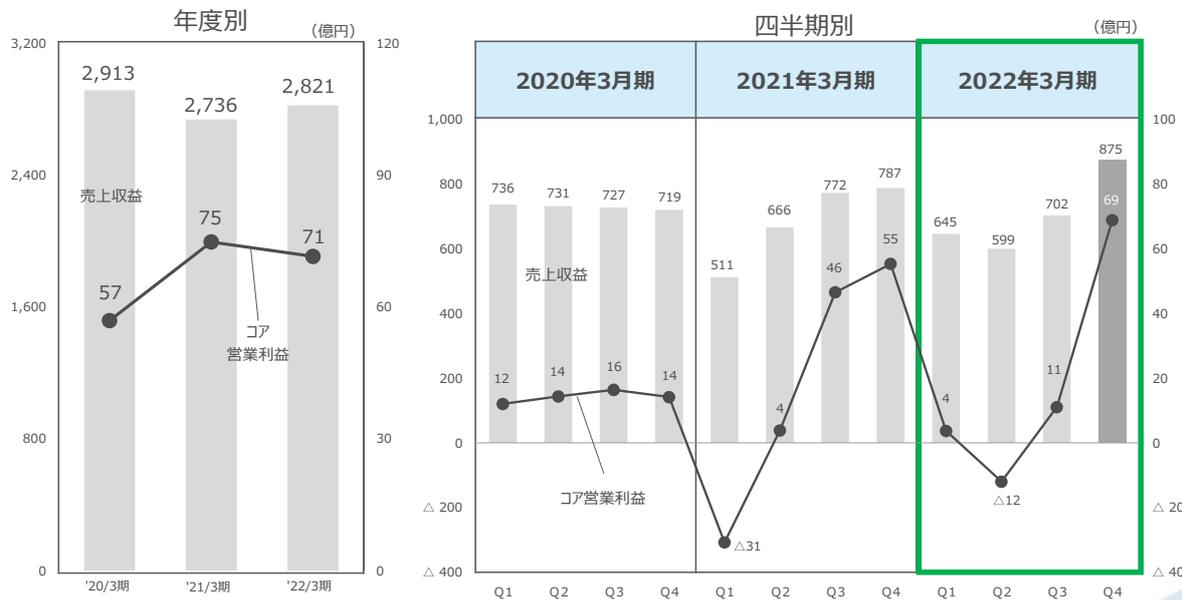
一昨年はコロナの影響が大きく、そこからの回復はありましたが、特に第2四半期以降、半導体を中心とした部品供給不足の影響により、第3四半期までは苦労しましたが、第4四半期に入ってから生産、販売とも大きく回復をしたということで、年間では対前年で増収となりました。

コア営業利益につきましては71億円となり、対前年で3億円の減益となりました。これは、部品供給不足による生産の混乱、またコストアップの影響が大きく、悪化したということです。

一方で、子会社の売却益、金融資産の評価益を計上したことから、その他の収益が増益となり、営業利益につきましては91億円となり、対前年で42億円の増益、税引前利益は85億円となり、対前年で40億円の増益、また当期利益は59億円となり、対前年で37億円の増益とるなど、営業利益以下の段階損益につきましては、対前年で大きく増益になりました。

全社 売上収益・コア営業利益推移

- 不足部品に対応した設計変更や新商品の投入などの対策により、4Qは売上収益・コア営業利益が大幅に回復

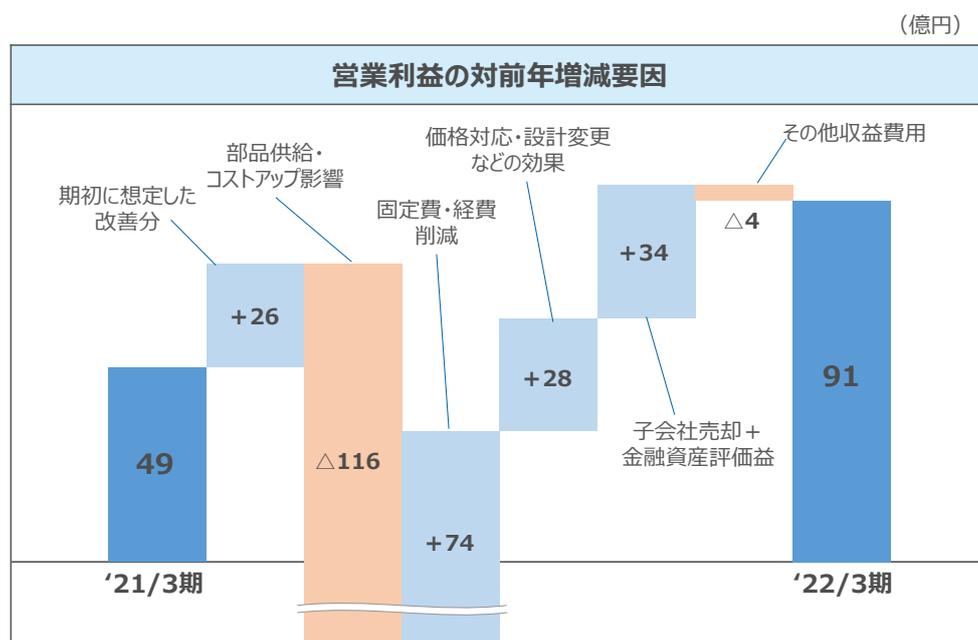


四半期別の全社の売上収益・コア営業利益の推移です。

2022年3月期の第4四半期は、売上収益が875億円、コア営業利益が69億円で、過去2年と比較して非常に大きな実績となりました。

これは第2四半期から第3四半期にかけて、部品の供給不足によって生産ができず、なかなか商品の出荷ができませんでした。第4四半期に生産が回復し、一気に商品の出荷ができたことによるものです。

2022年3月期決算 営業利益の増減要因



7

営業利益の対前年度増減要因です。

2021年3月期の営業利益は49億円の実績でした。2022年3月期は26億円の増益を期初に想定し、75億円という営業利益の業績予想を出しました。

結果的に、2022年3月期は部品供給やコストアップの影響が、年間で116億ほど発生したと見ております。それに対応する策としまして、固定費・経費の削減で74億円の挽回。また、価格対応や部品不足に対応した設計変更をした商品を出す等の対応策で、28億円の挽回を図りましたが、ここまででは期初予想に対してまだ10億ほど足りなかったという内容です。

子会社売却益や金融資産の評価益等を34億円計上し、その他の収益費用が増えたことで、営業利益は最終的に91億円の実績となりました。

4Qのサプライチェーン問題について

4Q影響額 : 売上収益△39億円、コア営業利益△20億円

通期影響額 : 売上収益△337億円、コア営業利益△116億円

M&T	半導体を中心に部品供給問題が継続するも、部品置換え設計品や新商品の導入などで挽回を図り、4Qでは大幅な生産・販売増を達成。一方で、期末に発生した上海地区のロックダウンにより工場の稼働停止が発生
PS	半導体などの部品供給不足が続き、想定以上の影響が発生
MS	影響は限定的に留まる
物流	依然リードタイムが長期化しているものの、米国での通関業務の改善により4Qの米国販売は大きく回復

8

サプライチェーン問題についてまとめたページです。第4四半期の影響としては、売上収益で39億円、コア営業利益で20億円の悪化要因があったと見ています。

年間では、売上収益で337億円、コア営業利益で116億円の悪化要因となりました。第4四半期に関しては、第3四半期、第2四半期に比べれば影響は減少してきているものの、まだ影響は大きかったと見ています。

分野別の状況ですが、モビリティ&テレマティクスサービス（M&T）分野につきましては、やはり半導体を中心に部品供給問題が継続していますが、不足部品を置換えた設計品や、新商品導入で挽回を図り、第4四半期では大幅な生産・販売増を達成しました。

ただ一方で、上海にM&T分野の工場がありますが、3月に入りロックダウンで稼働が停止したことで、影響を受けました。

パブリックサービス（PS）分野については、半導体と部品供給不足が第4四半期も継続し、想定以上に影響が発生したと見ています。

メディアサービス（MS）分野は、一部の商品で部品供給不足がありましたが、全体では限定的な影響にとどまったと見ています。

また物流につきましても、依然として船便などリードタイムが長期化しているところは変わっていませんが、アメリカでの通関業務が今年に入ってからかなり改善したこともあり、M&T分野、PS分野のアメリカ向けの販売については、この第4四半期で大きく回復しました。

サプライチェーン問題の4Qの対応について

- 国内ではJVCケンウッド長野の自動化ラインが立ち上がり、計画以上に生産回復。一方海外では、上海での新型コロナウイルス感染症拡大によるロックダウン影響を受け減産
- '23/3期以降は、用品向けナビの一部もJVCケンウッド長野へ生産移管し、中期的には50万台規模の国内生産体制を目指す



JVCケンウッド長野の自動化生産ライン



カーナビゲーション
MDV-M908HDF

9

サプライチェーン問題の4Qの対応についてまとめたページです。

国内回帰でJVCケンウッド長野において自動化ラインを立ち上げましたが、第4四半期の実績は順調に推移しており、長野においては部品も予定以上に入荷したこともありまして、計画以上に生産回復が進んでおります。

ただ先ほどもお話ししましたが、3月に入りまして上海でのロックダウンの影響によって工場の操業を停止せざるを得ず、ここまでは非常に順調に推移してきましたが、減産の影響を受けたといえると思います。

左下のグラフは、M&T関連の工場の生産台数を示したのですが、第3四半期決算発表時にご説明した時点では、2月、3月は計画対比130%ぐらいの生産は可能だと考えておりましたが、主に上海ロックダウンの影響で、計画比では2月は97%、3月は挽回して118%となりました。

そういった意味では、第3四半期決算発表時に想定していたところには若干届かなかったものの、2月でほぼ100%、3月では100%を超える生産を達成できたという内容です。

2022年3月期決算 分野別の状況

(億円)

		'20/3期	'21/3期	'22/3期	前期差	前期比
M&T	売上収益	1,597	1,571	1,643	+ 71	+5%
	コア営業利益	17	56	22	△ 34	-60%
PS	売上収益	707	609	581	△ 28	-5%
	コア営業利益	29	19	25	+ 6	+32%
MS	売上収益	554	501	534	+ 33	+7%
	コア営業利益	8	5	27	+ 22	+437%
その他	売上収益	55	55	63	+ 8	+15%
	コア営業利益	2	△ 5	△ 3	+ 2	-
合計	売上収益	2,913	2,736	2,821	+ 85	+3%
	コア営業利益	57	75	71	△ 3	-4%
M&T	OEMは中国市場の回復がけん引し、増収増益。アフターマーケットは4Qに急速に回復するも減収減益 テレマティクスサービスは、保険向けビジネス拡大も、部品高騰影響大で増収減益					
PS	無線システムは、米国無線子会社の売却影響を受け減収も、固定費削減で吸収 業務用システムは、JKPI回復、医療用モニター販売堅調で増収となり損失が縮小					
MS	メディアはBtoCが好調に推移、BtoBも市況の回復にともない販売が回復し、増収増益 エンタテインメントは、コロナ禍より復活してコンテンツビジネスが好調に推移し、増収増益					

10

分野別の状況です。まずM&T分野の売上収益は1,643億円で、71億円、5%の増収となりました。

アフターマーケットは、部品影響を受けたということもあって大きく減収となりましたが、OEMを中心に増収となったことから分野全体で増収となりました。一方コア営業利益については、22億円で、34億円の減益となりました。

こちらは、部品供給問題、生産の混乱、コストアップ等が大きく影響したと見ています。

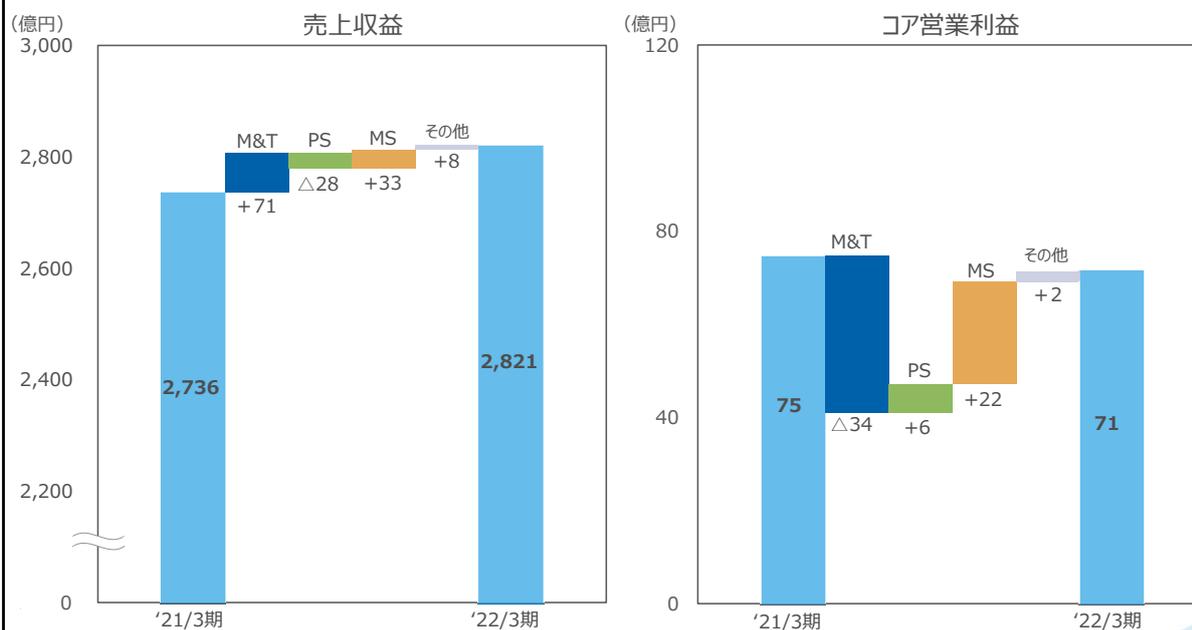
PS分野の売上収益は581億円で、28億円、5%の減収となりました。アメリカの無線子会社を売却した影響がありますので、その影響を除けば増収という実績でした。コア営業利益は25億円で、前年比で6億円の増益となりました。

無線については、部品の供給問題や、アジア地区のロックダウンの影響がありましたので、若干減益となりましたが、ほぼ前年並みを維持できました。一方、業務用システムについては、一昨年はコロナ影響で大きく減収となりましたが、今期は回復基調になってきたということで、増益となりました。

MS分野の売上収益は534億円で、33億円、7%の増収となりました。メディアは、BtoC事業が巣ごもり需要等もあり、前期に引き続き好調に推移したことに加え、BtoB市場も市況の回復に伴って回復してきました。

エンタテインメントについても、コンテンツビジネスが好調に推移したことで増収となり、コア営業利益は27億円で、前期比でも大きく伸びたという結果となりました。

2022年3月期決算 分野別連結売上収益・コア営業利益

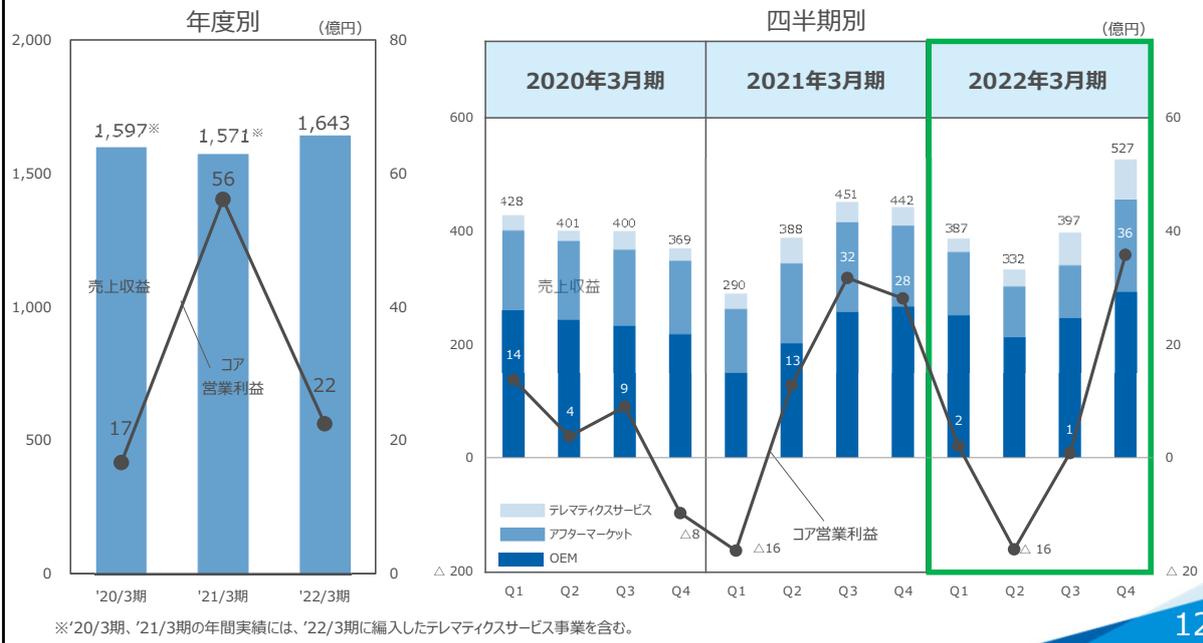


11

売上収益とコア営業利益の対前年度、分野別のグラフです。
今説明した内容となりますので、説明を省略させていただきます。

M&T分野 売上収益・コア営業利益推移

- 4Qは不足部品に対応した設計変更や新商品の導入などにより、3Q比で大幅に増収増益



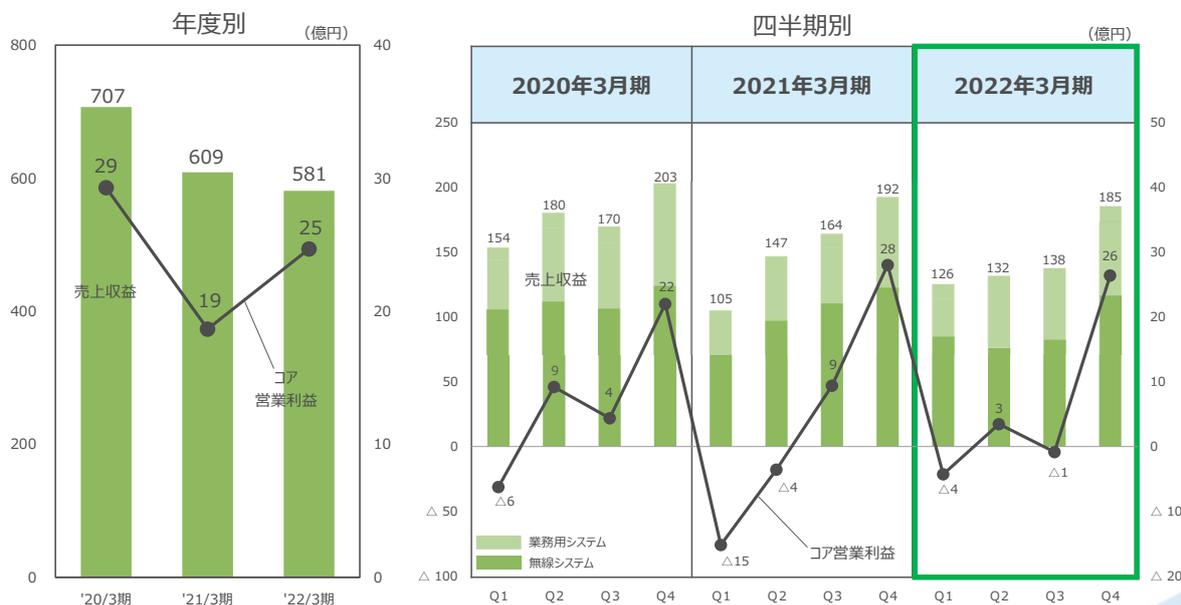
M&T分野の四半期別の実績です。

2022年3月期の第4四半期は、売上収益527億円、コア営業利益が36億円となり、大きく売上収益、利益ともに伸長しました。

通期では、特に第2四半期、第3四半期は部品供給不足の影響から大きく生産・販売・利益が落ちましたが、第4四半期は新商品や設計変更品の導入によって、大きく売上収益・利益ともに回復をしました。しかしながら、第2四半期、第3四半期の落ち込みの影響が大きく、残念ながら年間では前年比で大きく利益を落としたという内容です。

PS分野 売上収益・コア営業利益推移

- 4Qは子会社売却影響による減収影響を受けながらも、無線システムの販売が堅調に推移し、ほぼ前期並みまで回復



13

PS分野の四半期別の実績推移です。

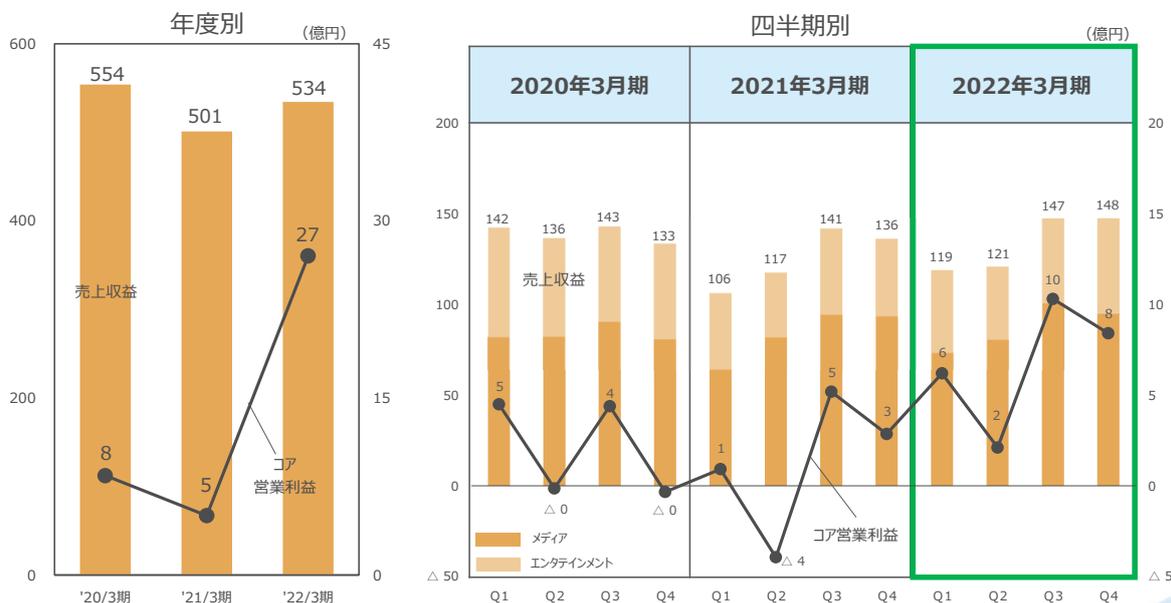
2022年3月期の第4四半期は、売上収益185億円、コア営業利益は26億円という実績となりました。

通期では、特に第3四半期に部品供給不足の影響から、生産が大きく落ち、対前年でも売上利益とも大きく落としましたが、部品供給不足問題が若干緩和してきた部分と、先ほどご説明しましたアメリカの物流が大分戻ってきています。特に無線はアメリカが主力市場ということもあり、物流改善による販売増の効果もあって、この第4四半期はほぼ前年並みまで回復することができました。

この結果、分野全体では子会社売却の影響もあって減収となりましたが、利益につきましては年間でも増益となりました。

MS分野 売上収益・コア営業利益推移

- コロナ禍による生活様式の変化に対応、事業体質の強化により、メディア、エンタテインメントとも好調に推移し、増収増益



14

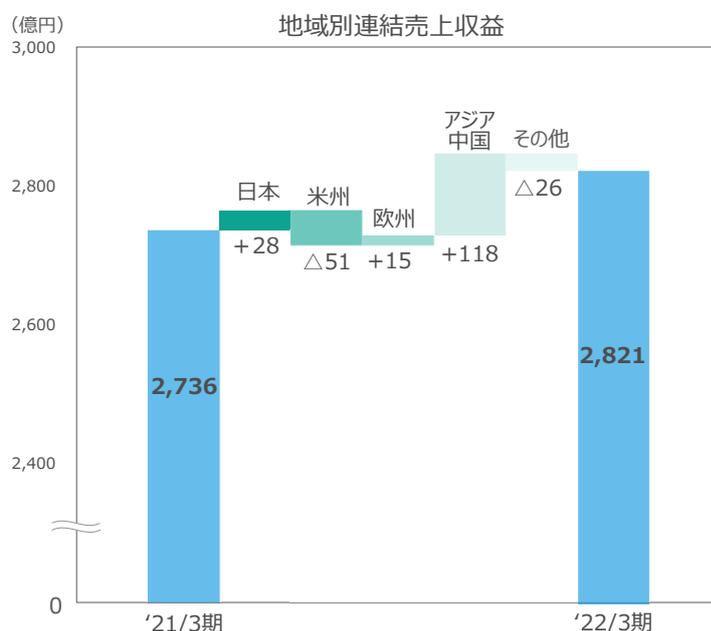
MS分野の四半期別実績推移です。

2022年3月期の第4四半期は、売上収益148億円、コア営業利益8億円となりました。

年間通じて非常に好調に推移し、年度でも大きく売上収益を伸ばし、利益も大きく回復をしました。

2022年3月期決算 地域別連結売上収益

■ 欧州・アジア・中国はM&Tが好調に推移。4Qに大幅に生産と売上が回復し、日本も増収に



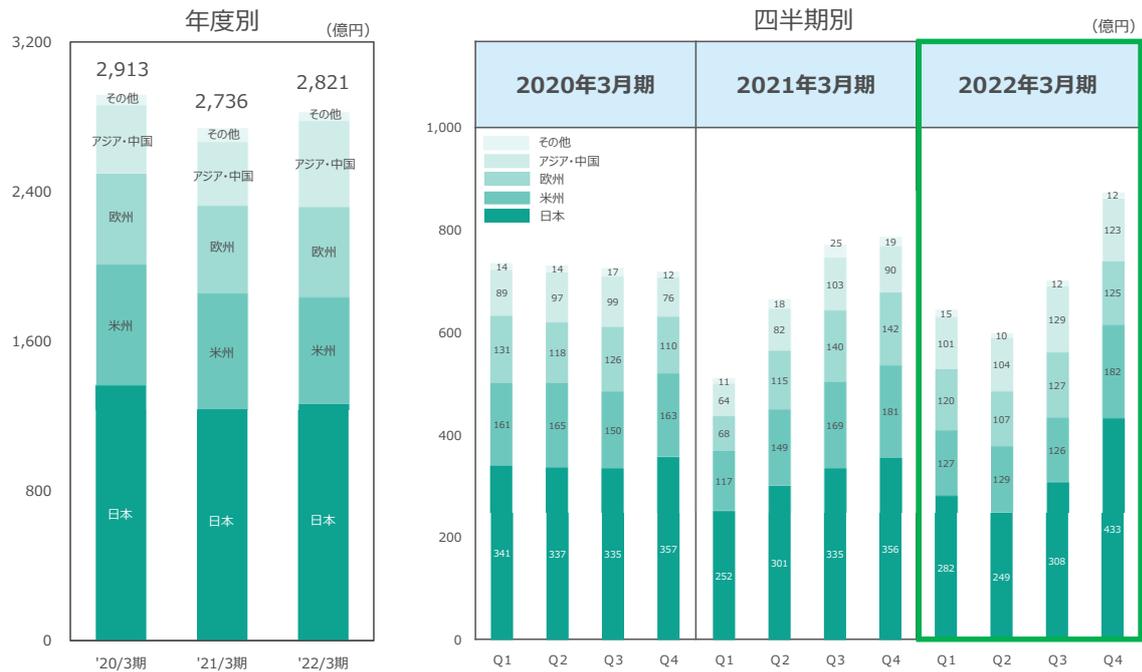
15

連結売上収益を地域別で表したグラフです。

一番大きく伸びているのが、アジア・中国ですが、これは特に中国向けのM&TのOEMの販売が非常に好調だったことが要因です。

また日本が28億円の増収となっていますが、第3四半期までは累計では対前年で減収だったのですが、先ほど申し上げたとおり第4四半期に長野での生産が非常に好調に推移したということで、国内中心に売上が伸長し、年間では対前年で増収になったという内容です。

地域別連結売上収益推移



16

地域別連結売上収益推移のグラフです。

2022年3月期の第4四半期のグラフですが、一番下の濃い緑色が日本向けですが、第4四半期に非常に大きく伸長し、全体の売上収益を押し上げているという内容です。

2022年3月期決算 連結損益（要約）

- 子会社の売却益及び金融資産の評価益を計上したことに加え、繰延税金資産の計上などにより税金費用の増加が軽微となったことから、営業利益・税引前利益・当期利益とも大幅な増益

(億円)

	'20/3期	'21/3期	'22/3期	前期比
コア営業利益 [※]	56.8	74.7	71.4	△ 3.3
その他の収益・費用、為替差損益等	△ 16.0	△ 25.8	19.1	+ 44.9
営業利益	40.8	48.9	90.5	+ 41.6
金融収支他	△ 12.0	△ 3.6	△ 5.4	△ 1.8
税引前利益	28.8	45.3	85.2	+ 39.8
法人所得税費用	15.4	18.3	21.5	+ 3.2
非支配持分	3.8	5.5	5.0	△ 0.5
親会社の所有者に帰属する当期利益	9.5	21.5	58.7	+ 37.2

※ 営業利益から、その他の収益、その他の費用、為替差損益など、主に一時的に発生する要因を控除したものの

17

コア営業利益以下の段階損益の内容です。

コア営業利益は71.4億円で、前期比で約3億円の減益となりました。

それに対して、その他の収益・費用のところでは、19.1億円のプラスになっていますが、こちらには子会社の売却益や、金融資産の評価益の計上がありましたので、前期比で大きく利益が増加しています。

この結果、営業利益は90.5億円となり、約42億円の増益。税引前利益も85.2億円で、約40億円の増益。最終の親会社の所有者に帰属する当期利益も58.7億円で、約37億円の増益となりました。

2022年3月期決算 財政状態サマリー

- 現預金は借入金減少もあり487億円と前期末比109億円の減少。ネットデットは52億円増加も4Qでは64億円の減少
- 親会社の所有者に帰属する持分は、利益計上とその他の資本の構成要素が増加したことなどにもない増加

(億円)

	'20/3期末	'21/3期末	'22/3期末	前期比
資産合計	2,497	2,643	2,808	+ 165
負債合計	1,897	1,958	1,968	+ 10
資本合計	600	685	840	+ 154
有利子負債	746	756	698	△ 57
ネットデット	347	159	211	+ 52
ネットD/Eレシオ（倍）	0.61	0.25	0.27	+ 0.02
親会社の所有者に帰属する持分	565	646	795	+ 148
親会社所有者帰属持分比率（％）	22.6	24.5	28.3	+ 3.8

18

財政状態のサマリーです。

表の下から2番目の親会社の所有者に帰属する持分、いわゆる自己資本ですが、795億円で、前期比で148億円の大幅な増加となりました。

これは利益を計上したこともありますが、もう1点は円安が進行したということで、為替換算調整が大きく増加したことが要因となり、大幅な増加につながっています。この結果により、表の一番下にあります親会社所有者帰属持ち分比率、いわゆる自己資本比率は28.3%となり、4%弱の増加となりました。

また現預金は487億円で、前期から109億ほど減少しています。ネットデットも前期比で52億円増加して211億円となりましたが、第4四半期だけでは64億円ほど減少しており、第2四半期以降、部品供給問題がありましたが、何とか第4四半期では、キャッシュについてもある程度戻してきたという結果です。

2022年3月期決算 キャッシュ・フローサマリー

- 営業キャッシュ・フローは、4Qに大きく改善はしたものの、サプライチェーンの混乱にともない棚卸資産が増加し、運転資金が増加したことから収入が減少
- 投資キャッシュ・フローは、子会社売却の収入により支出が減少
- 財務キャッシュ・フローは、銀行借入れの返済を進めたことなどから支出が増加

(億円)

	'20/3期	'21/3期	'22/3期	前期比
営業活動によるキャッシュ・フロー	216	358	71	△ 288
投資活動によるキャッシュ・フロー	△ 197	△ 118	△ 98	+ 20
フリー・キャッシュ・フロー (営業活動によるキャッシュ・フロー+ 投資活動によるキャッシュ・フロー)	20	240	△ 27	△ 268
財務活動によるキャッシュ・フロー	△ 17	△ 53	△ 113	△ 59
合計	3	187	△ 140	△ 327

19

キャッシュ・フローのサマリーです。

営業活動によるキャッシュ・フローについては、第3四半期まではマイナスでしたが、4Qである程度戻し、71億円のプラスという結果となりました。

前期が非常に良かったこともありますが、288億円ほど減少しているということで、これはやはり主に部品供給不足や生産が混乱したことによって仕掛かり原材料が増加し、悪化につながったとみています。一方で、売上収益が第4四半期に非常に偏ったことがあり、利益は2022年3月期の計上になりますが、キャッシュ・フロー的には4月以降の回収になるということもあって、そういった期ずれもあり、71億円という実績となりました。

投資活動によるキャッシュ・フローは、98億円の支出となり、前期比で20億円ほど減少しましたが、こちらについては、子会社の売却による50億円のキャッシュインが含まれていますので、それを除きますと、30億円ほど投資も前期比で増加したという実績でした。前期はコロナ禍にあってかなり投資も絞りましたが、今期は投資も増やしているという内容です。

1. 2022年3月期 決算概況

2. 2023年3月期 通期業績予想

3. 中期経営計画「VISION2023」の進捗

The logo for JVCKENWOOD, consisting of the company name in a bold, sans-serif font, is positioned in the bottom right corner of the slide. It is set against a blue geometric background that forms a triangle pointing towards the bottom right corner of the slide.

(説明省略)

2023年3月期 通期業績予想

- 営業利益以下の段階損益は、前期に計上した子会社売却益及び金融資産の評価益（約34億円）分の減少から減益となるも、生産の回復や新規用品案件の開始などによりM&Tが増収となることから、全社売上収益は増収、コア営業利益は大幅増益見込み

- '23/3期の期末配当金は、1円増配し7円を予想 (億円)

	'21/3期実績	'22/3期実績	'23/3期予想	前期比
売上収益	2,736	2,821	3,000	+ 179
コア営業利益	75	71	95	+ 24
営業利益	49	91	80	△ 11
税引前利益	45	85	70	△ 15
税引前利益の 税引後の利益	22	59	40	△ 19

		'21/3期実績	'22/3期実績	'23/3期想定
損益為替レート	1米ドル	106円	112円	122円
	1ユーロ	124円	131円	130円

	'21/3期実績	'22/3期実績	'23/3期予想
期末配当金 (1株当たり)	5	6	7

2023年3月期通期の業績予想です。

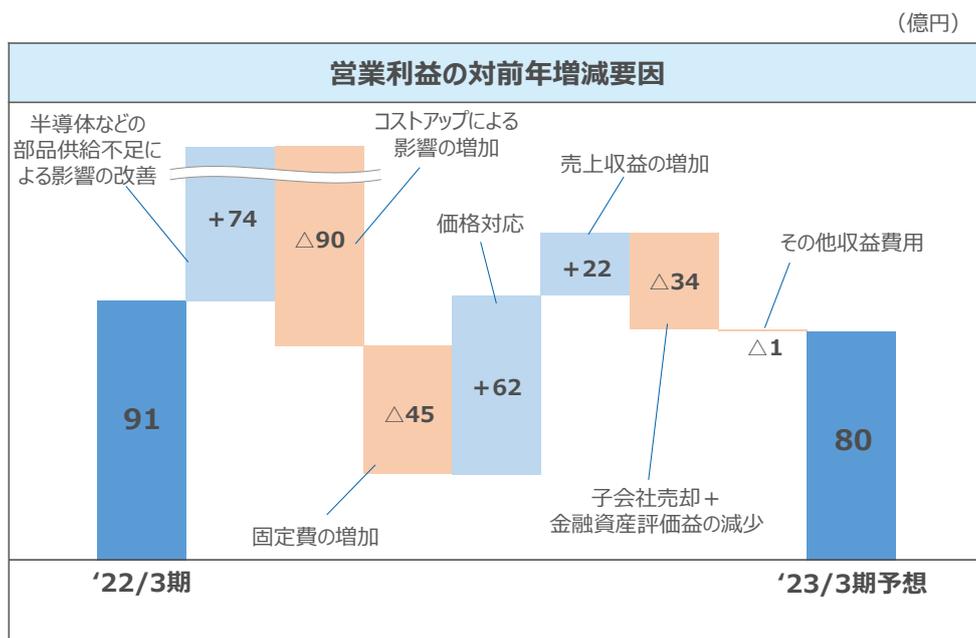
売上収益3,000億円、コア営業利益95億円で、前期比で増収増益の見込みといたしました。

営業利益につきましては80億円で11億円の減益、税引前利益が70億円で15億の減益、また最終の親会社の所有者に帰属する当期利益は40億円で、19億円の減益といたしました。

また配当につきましては、今期予定の6円から1円増配の7円を予想としています。

営業利益の前期比の増減内容は次のページで説明いたします。

2023年3月期 通期業績予想 営業利益の増減要因



22

2022年3月期の営業利益91億円から、今回業績予想でお示した80億円との差の内容を表したグラフです。まず、前期、大きく影響を受けた半導体などの部品供給不足による影響ですが、徐々に第4四半期も改善してきたことをご説明しましたが、2023年3月期につきましては、74億円ほど改善が見込めるとみています。

ただ、それ以上に大きいのが、コストアップによる影響で、前期は部品不足による影響からコストアップが主に効いてきたのは下期以降ですが、2023年3月期は年間で効いてくるということで、90億円ほどのコストアップによる悪影響があると見込んでいます。

一方、生産も増えていく見込みですので、工場の人件費など固定費も増加するというので、前期比で45億円ほどの固定費の増加も見込んでいます。

挽回策としては、まず価格対応で62億円ほど戻していこうと思っています。また売上収益の増加による限界利益の増加等で22億円、この2点で利益を戻しまして、コア営業利益につきましては前期比で改善を見込むという内容です。

またその他の収益・費用ですが、2022年3月期は子会社の売却益や金融資産の評価益を約34億円計上しましたが、こちらが2023年3月期には無くなるということで、この分が悪化要因になります。

以上から、営業利益については80億円、前期比で11億円の減益という見込みとした内容です。

2023年3月期 通期業績予想（セグメント別）

(億円)

		'21/3期実績	'22/3期実績	'23/3期予想	前期比
M&T	売上収益	1,571	1,643	1,810	+ 167
	コア営業利益	56	22	51	+ 29
PS	売上収益	609	581	608	+ 27
	コア営業利益	19	25	29	+ 4
MS	売上収益	501	534	528	△ 6
	コア営業利益	5	27	19	△ 8
その他	売上収益	55	63	54	△ 9
	コア営業利益	△ 5	△ 3	△ 4	△ 1
合計	売上収益	2,736	2,821	3,000	+ 179
	コア営業利益	75	71	95	+ 24

23

分野別の業績予想です。

全社では売上収益3,000億円、コア営業利益95億円で増収増益を見込んでいますが、分野別では、全体を押し上げているのがM&T分野です。

M&T分野につきましては売上収益が1,810億円、コア営業利益が51億円。前期比では、売上収益で167億円、コア営業利益で29億円と大幅な改善を見込んでいます。前期は部品供給問題など様々なことがあってかなり苦戦し、コア営業利益が22億円でしたが、一昨年、2021年3月期は売上収益が1,571億、コア営業利益が56億円であり、この一昨年レベルまで戻そうと考えておりますが、それほど無理な数字ではないと見ています。

PS分野につきましては、売上収益が608億円、コア営業利益が29億円で、若干の増収増益見込んでいます。

また、MS分野につきましては、売上収益が528億円、コア営業利益が19億円ということで、若干ですが売り・利益とも前期比では下がっていますが、一昨年に比べますと大きく改善しており、引き続き安定した利益が計上できると見ています。

以上が2023年3月期の業績予想の説明です。

1. 2022年3月期 決算概況

2. 2023年3月期 通期業績予想

3. 中期経営計画「VISION2023」の進捗

The logo for JVCKENWOOD, consisting of the company name in a bold, sans-serif font, is positioned in the bottom right corner of the slide. It is set against a blue geometric background that forms a triangle pointing towards the bottom right.

(説明省略)

VISION2023の位置づけ

「感動と安心を世界の人々へ」という企業ビジョンで掲げている経営理念の実践を通じて、ステークホルダーの皆様の期待に応える企業を目指す

『感動と安心を世界の人々へ』

「たくましさ」「したたかさ」
を併せ持つ
エクセレント・カンパニー
への飛躍

『変革と成長』

VISION2023
(2021-2023)

2020年ビジョン
(2018-2020)

- コロナ禍での緊急対策
- 全社・固定費改革の実行
- DX事業の立ち上げ

コロナ禍の閉塞感を打破し、
企業変革に向けた新たな歩み

- 安定した収益を稼げる体質への変革
- 事業ポートフォリオの再定義
- モビリティ&テレマティクスサービス事業の拡大

- 収益基盤の更なる強化
- 高収益事業による成長加速
- 持続的な企業価値の向上



社会課題の解決とサステナビリティ（SDGs）経営の継続推進

25

中期経営計画「VISION2023」の進捗について、ご説明します。

VISION2023は、「変革と成長」というテーマを打ち出しながら、将来の成長につなげていくための3年間という位置づけになります。

VISION2023 初年度の振り返りと成果

事業ポートフォリオ の再構築	<ul style="list-style-type: none">➢ 事業ポートフォリオの再定義による、モビリティ&テレマティクスサービス分野の組織再編とテレマティクスサービス事業の拡大➢ 民生用ビデオカメラ生産終了と成長事業へのリソースシフト➢ 子会社売却による無線事業ポートフォリオの組み替え
収益基盤の 強化	<ul style="list-style-type: none">➢ タイ生産拠点（JKET※1）での生産活動終了➢ JVCケンウッド長野への国内生産回帰と自動化推進➢ CEM※2プロジェクトによる事業体質の継続的な強化
経営課題への 対応	<ul style="list-style-type: none">➢ SCM※3改革推進部設置によるサプライチェーン問題への対応強化➢ サイバーセキュリティ対策の強化（JK-CIRT※4/CC※5の設置）➢ JVCケンウッド長野での車載製品に対する工場セキュリティ対応

※1:JVCKENWOOD Electronics (Thailand) Co., Ltd.

※2:COVID-19 Emergency Measure（新型コロナウイルス感染症 緊急対策）

※3:Supply Chain Management

※4:JVCKENWOOD Central Incident Response Team（サイバーセキュリティレジリエンス強化に向けた全社横断対応チーム）

※5:Coordination Center

26

初年度の振り返りと成果です。

ポートフォリオの再構築については、既にリリースしている内容のとおりですが、当社事業を「重点事業」「収益基盤事業」「次世代新規事業」「課題事業」の、4つの事業ポートフォリオに再定義しました。この1年間を振り返ってみますと、民生用のビデオカメラの生産を終了し、ドライブレコーダー、リモートカメラ等々の成長事業へのリソースのシフトを進めました。無線事業については、Zetron社の売却は既に完了し、今後はブロードバンド事業にリソースをシフトしていきます。

テレマティクスについては後ほどご説明しますが、成長の加速という観点から申し上げますと、かなり2021年度はその成果が表れたと思っています。

収益基盤の強化では、タイの生産拠点での生産活動を終了し、JVCケンウッド長野への国内生産回帰を実施しました。インドネシアでのナビの生産を国内に戻し、収益基盤の強化に努めました。

今後の経営課題として、2021年度に顕在化したサプライチェーンの混乱については、SCM改革推進部を4月1日付で設置しました。

サイバーセキュリティについても、JK-CIRT、コーディネーションセンターの設置をして、セキュリティ強化を図りました。

長野へのナビゲーション生産の移管については、自動車メーカーから要請されているセキュリティ対応もしっかりと進めていくという経営課題への対応ということでもあります。

サプライチェーンマネジメント（SCM）の改革について

- '22/3期に顕在化したサプライチェーンの脆弱性を全社の重要リスクとして改革
- SCM改革担当役員およびSCM改革推進部を設置（2022年4月1日付）

SCM改革推進部の主なミッション

- SCMに関連するKPIツリーの設定と監視、トラッキング、先手管理
- 棚卸資産の適正化に向けた活動、キャッシュ・フロー改善
- データの見える化などのITツール開発
- 調達、事業部、製造拠点、販社を繋ぐサプライチェーンプロセスへと、SPI※プロセスを刷新

サプライチェーンの最適化

プロセスの見える化とモニタリングを強化することで、事業計画の確実な推進と、キャッシュフローの観点で経営の意思決定の迅速化を図る

※:Sales・Production・Inventory

27

サプライチェーンマネジメント改革についての説明です。

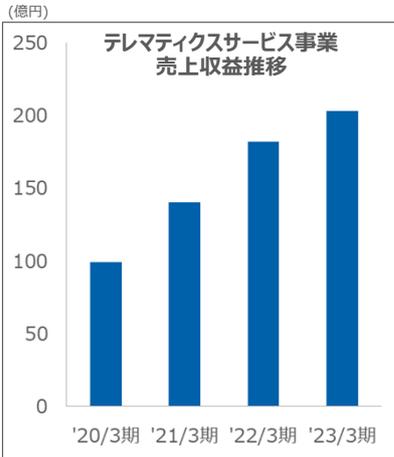
4月1日付で担当役員、およびSCM改革推進部を設置しました。

今後様々な問題が予見されることもありますので、プロセスの見える化、監視、モニタリングを強化することで、確実に事業の推進を図ること、また今回課題となった棚卸資産の適正化について、原材料、在庫の増加がありましたので、キャッシュ・フローの観点から経営の意思決定、事業の迅速化を図っていきます。

成長領域および重点事業の取り組み強化

■ テレマティクスサービス

- 通信型ドライブレコーダーの展開領域の拡大
→ 損保、建機やバイク、工場向けなど
- 米国でのバイク向けやフリートマネジメント向けビジネス拡大

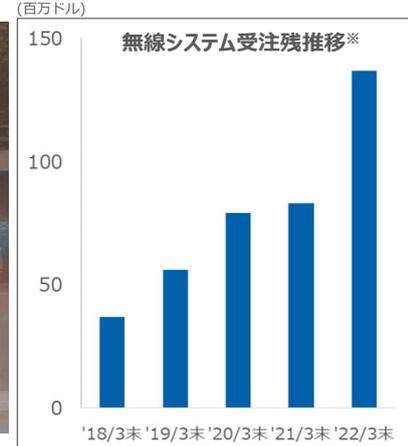


■ 無線システム

- 米国市場は引き続き堅調。受注残積み上げを継続して推進
- パブリックセーフティ市場向け新商品マルチバンド（トライバンド）対応ポータブル機を導入し、シェア拡大への布石とする



トライバンド対応ポータブル機で顧客層拡大を図る



※:米国無線子会社EF Johnsonのみ。

28

成長領域、重点事業の取り組みということで2点触れさせていただきます。

テレマティクスサービスについては、前期、特にメガ損保向けのプレミアムドラレコというスマホタイプを導入し、大変伸長しています。2023年度3月期についてもまだまだ伸長を見込んでいます。

現在MS&AD様の自動車保険の契約数は、およそ1,800万件ぐらいあると言われており、当社の累計出荷台数が大体150万台前後ですので、まだ付帯率としては10%弱という状況です。保険会社様も付帯率向上を目指すとお聞きしておりますので、今後数年間は伸長は見込めると考えています。

無線システムですが、米国市場、特に前期は第4四半期にかけて堅調に推移しました。

このグラフは子会社のEFJTというP25の無線機をメインに販売している会社のもので、前期末の受注残が130Mドルとなり、昨年と比較しても2倍弱ぐらいの受注残を抱えている状況です。この事業を強化するため、今期の第3四半期ぐらいになります。新商品のマルチバンドタイプのポータブル機の導入を予定しています。

今後は要求仕様を満たすマルチバンドタイプを投入することによって、入札案件が増えるということがあり、これを皮切りにさらなる受注案件の拡大を図っていきたく考えています。

EV化対応とサステナビリティ経営の体現



- 使用済みバッテリーの再利用に最適化した設計をすることで、サステナブルな社会の実現に貢献する商品を提供



<製品に使用されるリーフの再生バッテリーセル（左）と開発中の製品イメージ（右）>

29

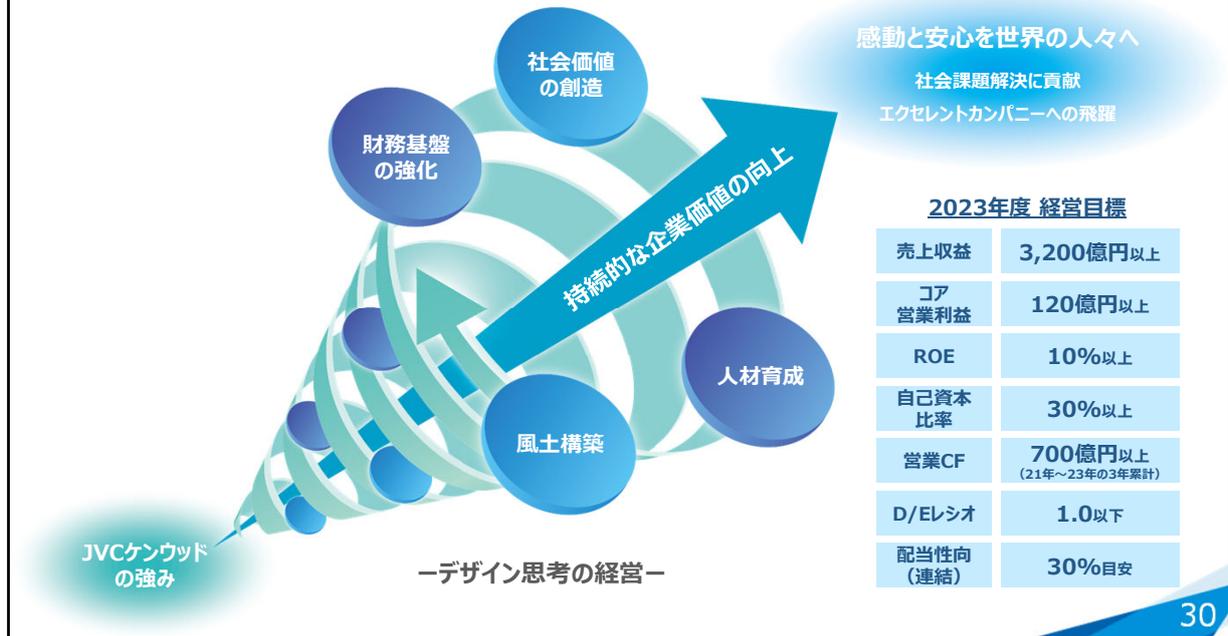
4月26日にリリースをいたしました。日産さんとフォーアールエナジーさんと連携して、リサイクルバッテリーを利用したポータブル電源の開発を開始しました。

リーフは国内で累計49万台を既に販売しておりますが、フォーアールエナジーさんと組んで、この使用済みバッテリーを再利用するというビジネスです。環境負荷低減などいろいろな意味でサステナブルな社会に貢献し、一方でEV車が増加すると大きくなるビジネスだと考えています。

一方で、当社はポータブル電源ではカールート、もしくはホームルートで、既に60万台程度の規模のビジネスをやっておりますが、こういったバッテリービジネスも、将来的には非常に成長する領域として目指せる分野であろうと考えています。

中期経営目標とJVCケンウッドの目指す姿

- VISION2023「変革と成長」で掲げる戦略を着実に実行し、コミットメントをやり抜く



グローバルでJVCケンウッドの目指す姿として、利益ある成長と社会課題の解決、この2点を両輪としたSDGs経営を推進していきます。

2023年度の経営目標については、ここに掲げているとおりですが、この1年半ぐらい、コロナもしくは部品不足の影響などで大変トップラインにおいては苦戦しました。中間年度である2022年度につきましては、ビジョン達成の射程圏内に十分入っていると思っています。今後、この刻々と変わる世の中の動向を見極めながら、多様な社会課題の解決につなげていきたいと考えています。

それから先ほど日産のリーフのところでも、49万台と申し上げましたけれども、この49万台は日本の市場のことで、グローバルでは59万台販売されているということですので、補足のコメントとさせていただきます。

持続的な企業価値の向上に向けて

- 外部の評価指標を取り入れ、ESG強化によって持続的な企業価値向上を目指す



FTSE Blossom
Japan

ESG指数
「FTSE Blossom Japan Index」
構成銘柄
初選定



FTSE Blossom
Japan Sector
Relative Index

ESG指数
「FTSE Blossom Japan
Sector Relative Index」
構成銘柄にも選定



第3回日経
「SDGs経営」調査
星3.5



2022
健康経営優良法人
Health and productivity
ホワイト500

健康経営優良法人
(大規模法人部門)に
5年連続で認定
ホワイト500は4回目の選定



LGBTなどの性的マイノリティに
関する取り組みの評価指標
「PRIDE指標」最高位「ゴールド」を
4年連続で受賞



女性活躍推進法に基づく
「えるぼし」認定の最高位



大和IR「2021年インターネットIR表彰」
3年連続優良賞を受賞

(説明省略)

JVCKENWOOD

このプレゼンテーション資料に記載されている記述のうち、将来を推定する表現については、将来見通しに関する記述に該当します。これら将来見通しに関する記述は、既知または未知のリスクおよび不確実性並びにその他の要因が内在しており、実際の業績とは大幅に異なる結果をもたらすおそれがあります。これらの記述は本プレゼンテーション資料発行時点のものであり、経済情勢や市場環境によって当社の業績に影響がある場合、将来予想に関する記述を更新して公表する義務を負うものではありません。実際の業績に対し影響を与えうるリスクや不確実な要素としては、(1) 主要市場（日本、米州、欧州およびアジアなど）の経済状況および製品需給の急激な変動、(2) 国内外の主要市場における貿易規制等各種規制、(3) ドル、ユーロ等の対円為替相場的大幅な変動、(4) 資本市場における相場的大幅な変動、(5) 急激な技術変化等による社会インフラの変動、などがあります。ただし、業績に影響を与えうる要素としてはこれらに限るものではありません。